

ヨコハマシジラガイ飼育の試み（経過報告）

○先崎 優（金沢動物園）

金沢動物園は神奈川県横浜市金沢区にある草食動物を中心に飼育展示を行う動物園である。園の周囲は自然公園や市民の森からなる市内最大級の緑地となっており、当園では草食動物を活用した森づくりを行うなど里地里山的環境の保全にも取り組んでいる。

当園ではミヤコタナゴの系統保存を行っているが、タナゴ類の保全に関してはその産卵母貝となるイシガイ目二枚貝類の保全や飼育・繁殖技術の確立も大きな課題となっている。タナゴ類保全の一助となることを期待して、当園で実施しているヨコハマシジラガイの飼育試験等について経過を報告する。

循環式ビオトープでの飼育試験では、2024年8月6日に10個体、8月20日に4個体のヨコハマシジラガイを導入し、11月10日の計測時には全ての個体が導入時以上の湿重量を維持し、平均で0.3g増加した。ビオトープは8m×10m程の範囲に池や湿地、水路など水系を模した配置となっており、水中ポンプで水道水を循環させている。

屋内においては水生昆虫や魚類、両生類など複数のオーバーフロー水槽を連結している循環設備の一つで飼育試験を実施した。9月9日から3個体を用いて試験を開始し、11月10日の計測時には全ての個体で湿重量が増加していた。平均増加量は0.5gである。飼料の供給は行っていないが、水槽の観察面を清掃する際に除去した藻類は水槽水中に混和した。

また、屋内飼育試験と同時期に同じ循環設備内で二枚貝の主な餌資源と考えられる珪藻についての試験を行っている。水量が約7ℓの小型水槽4つ（A、B、C、D）を設置し、珪藻を繁茂させ、水槽から流出する珪藻数をカウントした。同試験の条件下では、平均6.3cell/mlの珪藻が流下していることがわかった。

流下数試験の後、A水槽にドジョウ1匹（湿重量0.9g）、B水槽にカワニナ10匹（湿重量9.2g）、C水槽にヌカエビ10匹（湿重量2g）を導入し水生生物が珪藻の流下数に与える影響を調べた。D水槽は比較のため水生生物の導入は行っていない。

試験の結果、珪藻の流下数はA水槽で2.7倍、B水槽で2.5倍、C水槽で2.9倍と増加し、D水槽では0.9倍と減少した。

これらの試験から、循環式ビオトープや水槽設備での淡水二枚貝の長期飼育実現の可能性が示唆された。また、餌資源となる珪藻については発生から貝に摂食されるまでの過程を解明することが飼育技術確立に重要であると考えられた。引き続き試験を重ね、水生生物の保全に貢献していきたい。